

1 教材によせる授業者の思い

本学級の児童においては、学校生活において善悪の判断に大きな問題はないように感じるが、児童一人一人の内面は不透明で、様々な心の揺れや葛藤を経験していると考ええる。

とりわけ、情報モラルについては、チャット等に関心をもつ児童も多く、判断の誤りや考えの食い違い等、今もこれからも経験することが多いと考える。

本教材が描くチャット場面での仲間外れや中傷につながりかねない言動について考え、自己を見つめさせていくことは、極めて有意義なことと考える。

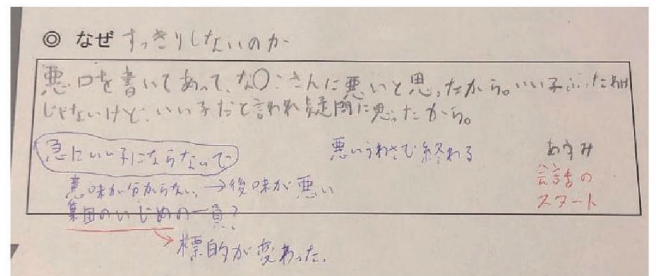


② 中心発問で、葛藤場面において気持ちがすっきりしない理由を問い、児童が多様な考えをもつことができるようにした。

＜「なぜすっきりしないのか」という問いかけに対して＞

- ・ 自分が出した話題が、個人を中傷するチャットになってしまっていたから
- ・ 自分も責められる対象になったから
- ・ 自分のコメントで会話が途絶えたから
など

③ 友達の考えに共感できるか問いかけ、他の考えを引き出しながら、「あゆみさんは悪口を言っているのか」「もともとどういう話だったのか」など、教師からゆさぶりをかけて考えを深めさせた。



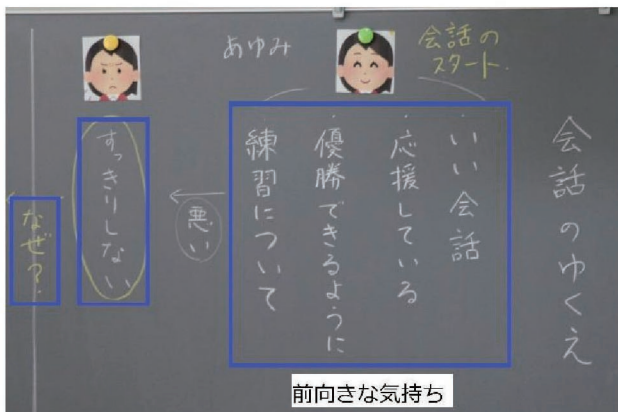
＜友だちの考えを書き加え(青)新たな考えを書く＞

2 授業の実際

視点 I

多様な価値観を表出させ、様々な考えに思いをめぐらせる発問の設定

① チャット当初、楽しく前向きにコンクールへの思いを高めていた主人公が、会話が進むにつれてすっきりしない気持ちに変わったことについて、「どうしてなのか？」と問いかけた。



④ 主人公が正しい行動ができていたかどうか、中心発問後に問いかけ、表現された児童の考えを受容した。

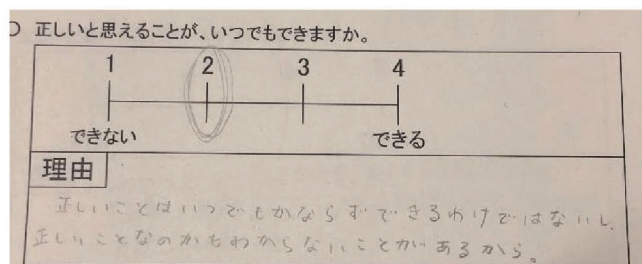
児童 A: アイディアを全体に募集しなければよかった。

児童 B: 一人に対してじゃなくして全体へのアイディアなら。

視点Ⅱ

道徳的価値に関するエピソードや葛藤経験などを表現させる場の設定

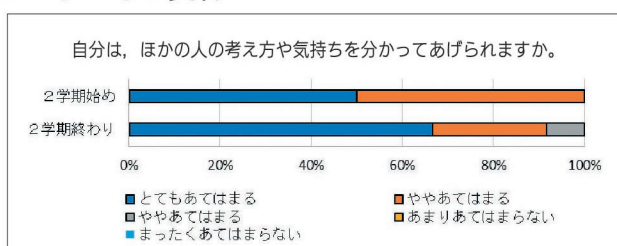
- ① 導入場面において、本時のテーマ「正しいと思うことがいつでもできるか」について考えさせた。4段階で自己評価するとともに理由も書かせることで、今現在の自分を見つめさせた。また、児童の発表を通して、友達の考えに触れるようにした。



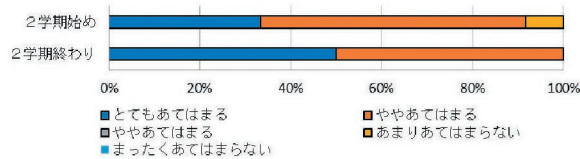
- ② 「主人公のように友だちとの間でモヤモヤした」「正しいと思うことができてモヤモヤしなかった」などの経験を想起させた。発表の際には、友達が話した経験に共感できるかといった視点をもたせ、聞く側に自分の経験につなげて考えさせ、深く見つめさせるようにした。



3 子どもの変容



道徳の時間には、これまでの自分の行動や経験についてじっくりと振り返ることができていますか。



〈考察〉

友達が表現する多様な価値観に触れて類似や相違を感じながら理解することは、自己理解の第一歩と考えられる。アンケートから他の人の考えや思いを分かろうとする気持ちが育っていることがうかがえる。このことは、道徳科における話し合いの充実の成果と言える。

また、視点Ⅱとして、自分の経験を振り返り、自分事として捉える場を大切にすることで、児童が道徳科の授業スタイルに慣れ、自分の経験を自然と関連付けられるようになってきた。アンケートから児童の意識の向上が見てとれる。

4 研究のまとめ (○成果●課題)

【視点Ⅰ】

○ 児童から迷いや葛藤を生み出し、多様な考えを表出させる中心発問の設定を第一に考えた。そのことを起点に、導入はどうあるべきか考え、後段ではどのような経験を想起させて自分事として捉えさせるかなど、児童の考えをきっかけにしてすべてを連携させた授業づくりを心がけた。

● 自らの生活や内面を振り返って表現する場面で、児童同士が共感し、思いがつながる場面があった。そのような場面を意図的につくり、教師がそれを揺さぶってさらに深めさせる立ち位置をとりたい。

【視点Ⅱ】

○ 「主人公のように○○した経験はないか」と問いかけたことで、主人公が自分とつながり、進んで自分の経験を想起し表現することができた。

● 児童の思いや考え、経験を整理して児童に投げかけ、より効果的にゆさぶる教師のコーディネーターが大切である。

実際の指導案はこちらへ▶

